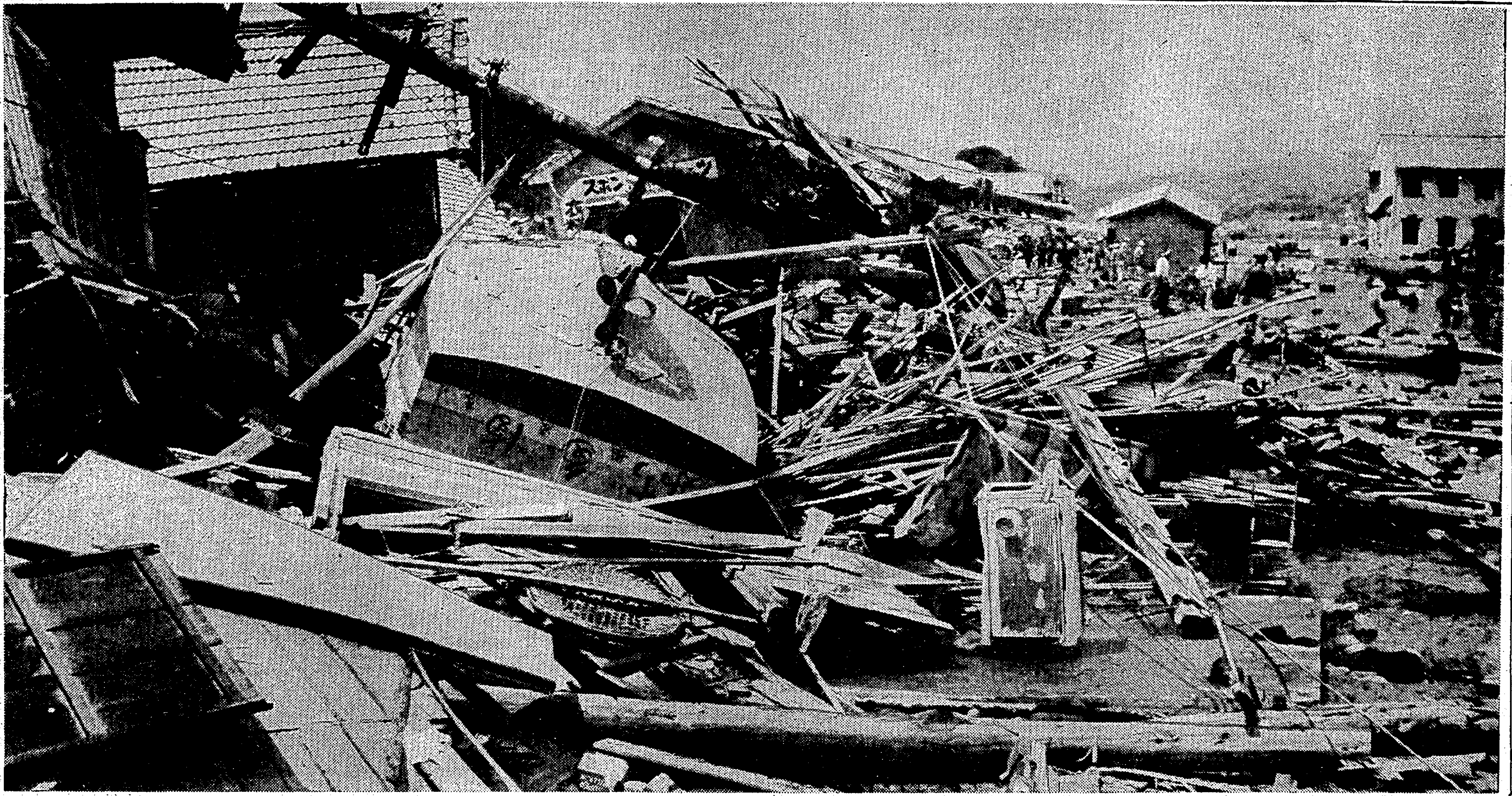
岩手日報

発行所
株式会社新岩手社
盛岡市内丸61
電話代表3131番
振替口座盛岡20番

© 新岩手社 1960



家の廃材や電柱が折り重なった
大船渡市大船渡町の惨状

全国で死者八五人

北海道、本州、四国、九州の太平洋岸一帯を襲った二十四日の大津波は各地に大きな被害を出した。とくに北海道、岩手、宮城、青森三県の三陸沿岸地方の被害がひどかった。岩手県陸前高田市、大船渡市、宮城県志津川町はほとんど全市街が被害をうけた。同日午後八時現在共同通信社の調べによると、死者八五、行くえ不明六九、負傷六九六人に達した。

被害状況（午後11時現在）

（県警調べ）

区分　署別	大船渡	釜石	宮古	岩泉	久慈	計
死者	53					53
負傷者	202	1	3			206
行くえ不明	19		1			20
建物全壊	184	74	155		1	414
〃半壊	651	144	167			962
〃流失	612	45	171		3	831
〃床上浸水	742	1527	1343		13	6325
〃床下浸水	244	687	751		10	1692
非住家被害	447	388			53	888
船舶沈没		3	2	1		6
〃流失		15	11		9	35
〃破損	4	156	26		2	188
〃ろかい等による船		20	10		113	143
水田埋没流失					15	15
カキ棚						
水田冠水		43				43
道路損壊		5	14			19
通信施設被害	1200	71			17	1288
被災世帯	1819	2255	1337		11	5422
被災者	9865	10815	6685		57	27422

三陸沿岸の被害甚大

大船渡、廃虚と化す

死者・不明七三人

二十四日早朝から三陸沿岸一帯を中心に本州太平洋岸を断続的に襲った津波による県下の被害は詳細がわかるにつれて増大する一方で、県警本部の集計によると午後十一時現在死者・行くえ不明七十三人、負傷二百六人、家屋の流失・全半壊二千四百九十五戸、床上・床下浸水八千十七戸、被災世帯は五千四百戸を越え、昭和八年三陸沖津波の死者二千九百人、流失家屋四千八十六戸につぐ被害となった。とくに悲惨をきわめたのは大船渡市で、大船渡湾の奥深い須崎、笹崎、台町の約二キロにわたる商店街は屋上まで水がつかり全滅に近く、確認された死者・行くえ不明四十八人という惨状を呈している。

被災者一万余人

大船渡市　大船渡署の調査によれば、午後五時現在、死者だけで三十七人、行くえ不明十二人となっている。被災者は大船渡小中両校、大洋学園などに収容されたが、悪夢のような津波の恐怖にただおののいている。大船渡市は災害発生と同時に臨時市議会を招集して日通、バス、電々、電力など公益機関に早急な復旧を要請する一方、自衛隊の派遣を要請、午後三時ごろ、岩手郡滝沢村一本木の自衛隊二百八十人が現地に到着、二十五日から一週間の予定で復旧作業を行なう。また同市は災害対策本部を大船渡小に設け、鈴木市長が陣頭指揮して万全を期しているが、岩手電気通信部は盛高校に移動局を開設、二十四日夜から寸断された市内線の復旧に着手したが、復旧までには二、三日かかるもよう。

同市の被災者は一万一千余人と推定され、このうち家をなくした者は約五千人で、各地から見舞品が続々よせられているが、とくに災害をまぬがれた地元部落からは米、ミソ、塩などトラックで三台、盛岡方面からジュース、パンなどが送られた。日赤防疫給水班三十人は同日午後、現地に着き飲料水の確保と防疫活動を行なっている。なお県選出の志賀健次郎代議士、細谷県商水労部次長、佐藤亦助、小野寺十治両県議らが災害地を慰問した。

大船渡署が確認した大船渡市内での死亡者と行くえ不明者次の通り

◇死亡▽八木ヤシエ(六〇)=大船渡町茶屋前▽同熊谷初江(三七)=同▽熊谷綾乃(四)=同▽江口美夜子(三七)=同町新田▽八木規(七七)=同▽水野蔵(三五)=同▽照井生(三三)=同▽石川良平(三七)=同町野々田▽石川博子(七七)=同▽石川健次(八七)=同▽小山浩平(三)=同町台町▽佐藤トミ子(三〇)=同町地の森▽熊谷リツ子(五九)=気仙郡三陸村綾里白浜▽佐藤淑子(三二)=宮城県本吉郡本吉町要害▽板内コト(六二)=大阪市東淀川区相川▽泉京子(三四)=大船渡町茶屋前▽泉多寄子(九七)=同▽孫慶敏(六三)=同▽熊谷昌二(一二)=同▽吉田イマ(五二)=同▽高橋カツ(三七)=同▽佐藤トミ子=同▽松田キク(三七)=同町新田▽村上栄吉(七九)=同▽鈴木一男(三二)=同▽平山善助(一五)=同▽蜂谷仁(五〇)=同▽鈴木誠一(一九)=同▽山口アヤメ(四七)=赤崎町生形▽佐藤イサ(六〇)=同▽林和(三七)=台町▽船越勇三=不明▽新沼アサノ(七七)=笹崎▽及川満(三〇)=北上市黒岩▽及川勝夫(三八)=同▽花川勝徳(三二)=盛町▽花川宣子(三八)=同（以上三十七人）

◇行くえ不明▽佐川チヨ(六〇)=不明▽花川正興(九七)=盛町内ノ目▽白崎正(三二)=台町▽志田和子(四七)=同▽水野静子(四七)=新田▽水野田一(一七)=同▽山口サワ(三七)=同▽山口三枝子(四七)=同▽鈴木静子(五七)=同▽松田洋二(三七)=同▽鷲田ヤ(七三)=須崎▽千葉功(六七)=茶屋前。（以上二人）

復旧見通し立たず

山田線（磯鶏—豊間根）大船渡線（陸前高田—盛）

盛鉄局施設部の調べによると、津波による鉄道関係被害は復旧工事関係の直接費だけで約一億円にのぼった。復旧工事は山田線吉里吉里—大槌間と八戸線八戸—陸奥湊間が応急復旧したものの、山田線磯鶏—豊間根間と大船渡線陸前高田—盛間は二十四日午後六時現在復旧の見込みがたたず、ことに大船渡線は冠水している区間がかなりあるため、被害の詳細もわかっていない現状である。山田線豊間根—磯鶏間の道床約二キロの流失復旧には日鉄釜石鉱業所から砂利二千立方メートルを緊急輸送する一方、盛岡、北上両保線区からも応援を繰り出し、現場には宿舎代用に客車を利用する。このほか盛岡市内などから一般請負業者の応援を求めるが、現地は一般民家もかなり被害を受けているため、復旧作業用の人夫が集められるかどうかを心配している。

盛鉄局管内の鉄道被害は全線不通または一部不通となった八戸、山田、大船渡、気仙沼の沿岸交通線区のうち八戸線八戸—陸奥湊間が二十四日午後四時五十分開通、山田線吉里吉里—大槌間は同夜六時四十分開通した。八戸線は二十四日上りは鮫発午後五時十分の四三二列車、下りは尻内発同五時四十五分の四三一列車から開通。山田線吉里吉里—大槌間は二十五日一番列車から釜石—豊間根まで運転する。また全線不通の気仙沼線は二十五日中に開通の見込み。

家屋流失80戸

山田町・家屋流失八十戸、全壊八十戸、半壊五十戸、床上浸水八百戸、床下浸水二百戸。

はかどらぬ復旧

陸前高田市　二十四日朝第一波の押しよせたころ高田松原沖でイワシの建網を起こしていた菅野実さん(五二)が海岸から六百mの沖へ潮がひいたので「津波だ」と直ちに部落へ通報した。夜があけて明るくなっていたのと十分ぐらいかかって水が押して来たため死傷者が少なかった。復旧作業は地元消防団のほか近接の佐田、千厩、大東町など千五百人を動員して行なわれているが、二十分おきに避難命令が出るのではかどらず、二十五日から自衛隊の協力を受ける。

午後四時までにわかった被害死者八人のほか、家屋の流失七十三、全壊百九、半壊二百六、床上浸水二百六十六、床下浸水六十五、非住家流失百二十九、全壊三十三、半壊四十六、小舟の流失二百四十八、破損三十七、耕作不能の水田二百十六ha、畑の流失五十ha、漁網の流失十九ヵ所、被害見積り額九億円と推定されている。死亡者の氏名次の通り。

▽吉田ミユキ(四七)=小友町花崎▽佐藤マサ(四七)=同町茂里花▽金野彦七(七二)=高田町中宿▽浦岡本留之助(六七)=気仙町砂森▽生出宗治(三〇)=同▽阿部マツノ(四七)=同町梁川▽千葉功四郎(七二)=小友町岩花。ほかに行くえ不明一人。

加工場に大被害

久慈市　津波被害対策本部の集計による午後四時現在の津波被害は、七百十万円となっている。▽動力漁船小破三隻（六万円）▽無動力船流失一二隻（六〇万円）大破一五隻（六五万円）小破一隻（二万円）▽船小屋流失五、倒壊五（一九五万円）▽加工場大破二〇むね（二四〇万円）小破五〇むね（一〇〇万円）▽漁具流失（六二万円）▽岸壁欠壊（四〇万円）魚道欠壊（四〇万円）

対策費二百万円

大槌町　役場内に津波災害対策本部を設け、午後一時から臨時町議会を開いて対策費二百万円を計上、復旧に乗り出した。被害者は大槌、安渡両小学校、江岸寺、大念寺などに収容、日赤県支部と県福祉課に援助を要請、毛布などの救援物資を受けた。また釜石保健所の協力を得て、浸水地区を消毒、防疫などに当たっており、遠野署から約十人の警察官が来町、釜石署員と一緒になって警備に万全を期している。

予想外にひどい

釜石市　二十四日正午市役所に津波災害対策本部が設けられ、午後一時からは緊急市議会全員協議会が開かれ、全議員が釜石港近辺の両石、鵜住居、箱崎などを視察した。

同市の被害は予想外に大きく、二十四日午後四時現在で家屋の全壊十戸、床上浸水八百戸に達し、漁業関係の定置網、カキイカダ、ノリヒビなどは全滅し、各加工業者の施設もかなりの損害を受けた。人命の損傷がなかったのは午前三時ごろには漁師が起きて漁に出るのでいち早く水がひいているのを知った三時半ごろには騒ぎ出したので避難が早かったためといわれる。また夜明けだったので避難に伴う混乱も避けられた。鈴木市長は復旧について次のように語った。

被害は相当ひどい。ことに両石、鵜住居など大打撃をうけたが、幸い両舟からの連絡が早かったので、釜石市街地の被害を最小限にくいとめることができ、住民も冷静に避難したため、死傷者のなかったのは、不幸中の幸いだった。早急に被害状況を調べて県を通じて中央に復旧予算を要求し復興に当たる。

市長が陣頭指揮

宮古市　金浜地区を中心に、午後四時半現在の被害は行くえ不明三人、家屋流失百七戸、半壊二十五戸、床上浸水三百六十戸、床下浸水四百五十二戸で市の対策本部は須藤市長の陣頭指揮で被災者救護に大わらわとなっている。市当局は被災者に米一・二キロ、パン三百食分、一人二枚の割合で毛布六百枚、たばこ、ローソク、マッチ、懐中電灯など日用必需品を。また宮古漁協組はパン百人分、副食物としてサンマと調味料七百人分をくばった。このほか、宮古カトリック教会からはパンと牛乳二百人分、山田漁港冷凍貯蔵店から食器三百人分が贈られた。自衛隊青森県三沢基地からは乾パン五百箱を積んだヘリコプターが宮古高校校庭に着き、午後四時には県駐とん部隊から松井一尉以下六十人が来宮、復旧作業に活躍している。

市の対策本部は二十五日から生産施設関係の災害を調べるが、ノリ、カキだなが全滅したほか大麦、小麦、苗代など農作物も全滅に近い被害を受けている。

波の静まった宮古湾内には材木や鉄、家具などが浮かんでいるほか波打ちぎわにヤギの死体が打ち上げられて生々しい災害のあとを物語っている。また宮古海運会社の扱っているフィリピン産のラワン材千二百本（約千八百万円）が流された。

▽行くえ不明者漁業金沢須助(三七)=金浜

本日八ページ発行

にっぽう時事川柳

押し切って自分の首が細くなり　盛岡市　吉田　芳樹

解散と辞職料ではかりかね　湯田村　太田　作蔵

ホコ先が日本に回る恐ろしさ　胆沢村　慈　外

外相の姿勢解散型となり　大槌町　豚　木

首相の心とは別に空は晴れ　岩手町　日　呂　史

風土計

二十四日未明三陸沿岸が津波に襲われた。津波は太平洋沿岸全域にわたっていたが、三陸沿岸にとってはまさに寝耳に水であって、天災は忘れたころにくるの感を深くした▼警報が出たときは一波見舞われたあとであった。それに、震源地は三陸沖とちがって、前日の二十三日同時刻ごろ南米チリに発生した地震波が、まる一日かかって太平洋を渡ってきたので、内陸に住む人たちには何ら予感を与えなかったのが、こんどの津波の特徴だった。だが、現地の被害がわかるにつれて、災害規模は意外に深刻なものがある▼気象台筋の観測によると、明治二十九年の三陸震災に比肩するというが、本県三陸震災は明治以後三回目である。この年の災害は死者二万人を数えた。昭和八年の震災には死者二千人に達した。死者の数は前回に比べると少ないようだがこんご判明する産業経済に現われる被害を考えると、新たな意味がでてくるのではなかろうか▼三陸沿岸の津波禍には三十年周期説がある。震源となる地殻の変動にはそれを証拠だてる学問的理由があることだろう。しかしとにかく津波に対して無防備状態だった明治以後、ことにも昭和八年の震災を機として津波対策は県の重要施策であった。前回の災害でもっとも被害が大きかった下閉伊郡田老町の大防波堤も前年ようやく完成したのであったが、津波禍も三十年周期ではいまの目まぐるしいときでは忘れがちになる▼今回の津波では、現地の被災にかかわらず警報がおくれたことは気象台当局に十分な反省をうながしたいが、それよりも重要なことはいろいろある。臨海工業都市建設に対するいましめもその一つである▼臨海都市の建設は開発のメドとなっているが、昨年の伊勢湾台風がこの臨海工業都市建設を検討させているとき、今回の津波禍は本県臨海工業都市建設に県民の期待を集めている大船渡地方の臨海工業都市建設に身近な教訓を与えるものだ

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。